

雅楽を楽しむ その 2

前々回のブログに続いて再び「雅楽、舞楽」の話。西洋音楽に明るい「長調」と暗い「単調」があるように、雅楽には 6 つの調子があります。その内、4 つが季節と結び付けられています。今の季節である【冬】は「盤渉調^{ばんしきちよう}」と呼ばれ、冷たく澄んだ空気をイメージした張り詰めた緊張感を表現する音(「シ(B)」に相当^{え てんらく})で奏でられます。今回は、中学「音楽」の雅楽鑑賞でも有名な「越殿楽」が盤渉調で演奏されました。^{そうじよう}

その他、【春】は「双調^{そうじよう}」と言われ、のびやかで雪解け水が流れ出るようなのびやかな柔らかい「ソ(G)」の音で、【夏】は「黄鐘調^{おうしきちよう}」という清涼な水表現する「ラ(A)」の音で、【秋】は「平調^{ひようじよう}」と呼ばれ、落ち着きのある雅楽の中で最も多く演奏される「ミ(E)」で奏でられるそうです。

また、第二部で披露された「舞楽」では、唐(中国)やインド・ペルシャ起源の「左舞^{さまい}」と、高麗(朝鮮半島)や中国北方起源の「右舞^{うまい}」とあり、それぞれの踊りの違いについて説明がありました。衣装も「左舞」は赤系統、「右舞」は緑系統の装束で、「陽」と「陰」に使い分けられおり、名の通りそれぞれ舞台に向かって「左舞」は左から、「右舞」は右から登場します。また、「左舞」は左足から舞台へ、「右舞」は右足から上がりますが、その踏み出す一歩目が特徴的でした。

本来、雅楽も舞楽も宮中の中庭など野外で演じられるものですが、今では室内の劇場で演じられることがほとんどで、前回のブログの写真のように正方形の高舞台^{たかぶたい}が設えられ、朱塗りの高欄^{こうらん}に囲まれた舞台となっています。この舞台に芝生を模した緑鮮やかな緑色の絨毯が敷かれていますが、何とこれが高価な正絹なのだそうです。

帰宅後、雅楽と舞楽の書籍を取り寄せ、改めて学習をしたところです。何事も興味を持つことで新しい世界が広がります。

ref. books

- 1)寺内 直子(2011)『雅楽を聴く ―響きの庭への誘い』岩波新書,224 頁.
- 2)遠藤 徹監修、イラスト:辻 相旬(2024)『マンガでわかる雅楽:観賞ポイントを押さえて楽しむ雅の極み』誠文堂新光社, 160 頁.
- 3)佐藤 浩司(2012)『雅楽「源氏物語」のうたまい』天理教童友社,132 頁+DVD.